

# 全科協ニュース

1984年3月1日発行  
(通巻第76号)

全国科学博物館協議会

東京都台東区上野公園  
国立科学博物館内

〒110

Tel. 03-822-0111(大代)

**おもな内容：**◇資料紹介展「植物のルーツをさぐる～ふるさとと北米の植物」について 岐阜県博物館 ◇新しい展示 ディーゼル機関車 交通科学館 ◇ふるさと東京「農家のくらし」の整備に係る基本構想 東京都児童会館 ◇全科協北から南から アマチュア無線クラブの活動を通して 川口市立児童文化センター 松田正彦 ◇ヨーロッパ科学系博物館研修旅行に参加して 東芝科学館 栃木謙志 ◇会員館園の紹介 倉敷市立自然史博物館 福岡市立少年文化会館 ◇会員館園の消息

## 〔特別展〕

### 資料紹介展「植物のルーツをさぐる～ふるさとと北米の植物」について

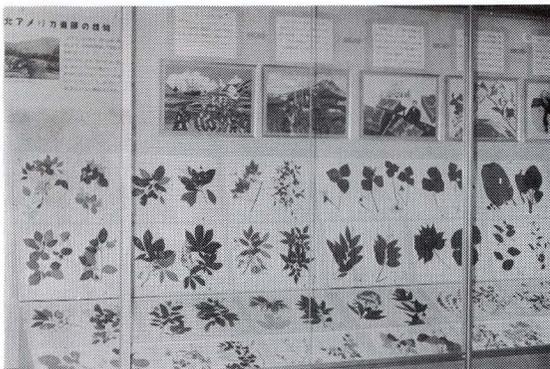
岐阜県博物館

4年ほど前、帰化植物の展示に際し、原産地での生態写真が欲しくなり、欧米の博物館へ依頼したことがあった。その中で北アメリカのカーネギー自然史博物館は、当館との植物標本の交換を希望してきたため、以来毎年400点ずつの交換が続いている。

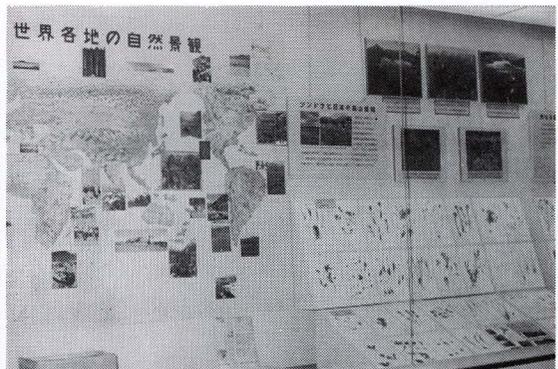
御承知のように、日本を含めた東アジアと、北アメリカ東部とは、第三紀起源の温帯性の植物群があり、すでに120年も前に、A. Gray が、「北米東部～東アジアの植物分布論」をひっさげ、それまでの「種は不変、生物は神の創造物」としていた主流説に、動的な自然観、地史とのからみから、歴史的な時間の反映としての分布論で、痛烈な一撃を加えた科学上のエピソードは興味深

い。岐阜県の東濃地方を中心に、ごく狭い地域のみ分布しているカエデ科のハナノキこそ、そうした北米東部との隔離分布の典型例として、自生地の多くが、国、県、市町村の天然記念物に指定されている。

今回の資料紹介展では、岐阜県内から収集した当館所蔵の標本と、カーネギー自然史博物館から送られてきた北米産の植物標本とを、近縁種で対比して展示することを主眼とした。おし葉標本といえ、地味で目立たないもので、展示効果が乏しいもののように思われがちである。しかし、おし葉標本を見せるだけでなく、標本が物語る「事実・真理」は美しく、人々の心を魅了するはずである。ペリーにひきいられたアメリカの艦隊が、浦賀

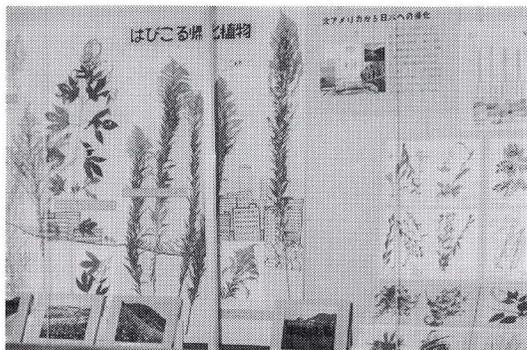


同じ属の近縁種が、対比して展示してある



図表等多用し見学者の興味をひくように……

の沖に現れた黒船騒動の最中、二人の乗員が上陸して日本の植物を採集した史実に始まり、A. Gray が「分布論」の発表に到るまでのエピソードを、絵物語りとして展示する大きな視野から、日本と北米東部の温帯落葉広葉樹林の類似性を浮き彫りにするために、世界絵地図に各地の自然景観のカラー写真を配した大パネルを作る、写真・分布図等を多用し視覚的な補助教材を使う、等の努力をした。



原寸大の乾燥標本も使って、目を引くように……

〔新しい展示〕

## ディーゼル機関車の展示

交通科学館では、国鉄動力近代化を推進したディーゼル機関車のうち、DF50形とDD54形の2機種を展示した。1両当り長さ約15m、重さ70tに必要な展示場は、隣接する国鉄高架の下に取得し、新たに展示場の拡張を図った。

DF50形は、昭和31年より138両製作され、ディーゼル機関車実用化のスタートを切ったものである。スイススルーサー社との技術提携によるディーゼル機関を搭載し、発電機を駆動して走行する電気式であり、その後、液体変速機の開発が進み、この方式は使われなくなった。

DD54形は、昭和41年より40両製造の液体変速機を備

アメリカの標本植物には、和名がないので、展示品見学の基礎として、学名のつくりを理解していただくよう「植物の分類表」「種から科へ」の図表と対比させ、属別に標本を配し、属の概念づくりと、学名の見方についてかなりのスペースを使った。展示内容の概要は、①学名とは、②北アメリカ東部の植物、③比べてみましょう④ツンドラと日本の高山植物、⑤異なる植物のなかま、⑥日本の特産植物、⑦急変する植物社会(7-1)北アメリカへ入った帰化植物、(7-2)北アメリカから日本への帰化の8コーナーである。展示標本は県内産約150点、北米産約180点、会場ようすは写真で見ていただいた通りである。去る2月10日にオープンし、4月8日までの開催、希望される団体には、関連した内容の「植物教室」の開催に応じているし、日曜上映会として、自作スライド「日本と北米東部の植物」、「世界の植生と日本」を定期的上映している。

解説パネル、図表その他すべて学芸員の手づくりであり、標本展示台は、過去の特別展の折に設計して委託製作したもので、催し物の都度使用できるようにしてある。  
(小野木三郎)

## 交通科学館

えた中型機である。当時、すでに液体変速機を持つ大型機が国産化されていたが、なお世界最高のこの種技術を導入した機関車である。西ドイツ、マイバッハ社との技術提携による1台の大型高速機関と液体変速機を備えており、国産機が小型を2セット備え必要な出力を得ているのと対照的である。

ディーゼル機関車が、蒸気機関車に比べ遜色のない性能を発揮するには、軽量の高速、大出力機関と液体変速機の開発が不可欠であった。2両の保存展示は、そうした技術開発史を語ってくれるものである。

(木村 宏)



## ふるさと東京「農家のくらし」の整備に係る基本構想

東京都児童会館

人類が発生して以来、科学とは、自然とその一部である人間との接点を探る技術の積み重ねであると言える。換言すれば、人類の自然に対する働きかけの方法とも言える。その意味からして、理論のみの科学が現実から遊離したり、勘や経験のみに頼った技術が時代から取り残されてしまうことにもなる。時代を断片的に捉えれば、技術が科学の進歩に逆行していた事もあったが、石臼を挽く方法が変遷してきたように、失敗を糧として更に良い方法へと技術改善が行われ、その結果としてピラミッドの頂点に現在の科学技術があるわけである。

東京都児童会館科学展示室では、かねてより「児童が人類とそれを取り巻く自然との関係を、科学技術の進歩という面から捉え、太古から遠い未来へと夢を育むことのできる展示を製作する」との視点にたち、整備更新の企画を立ててきた。

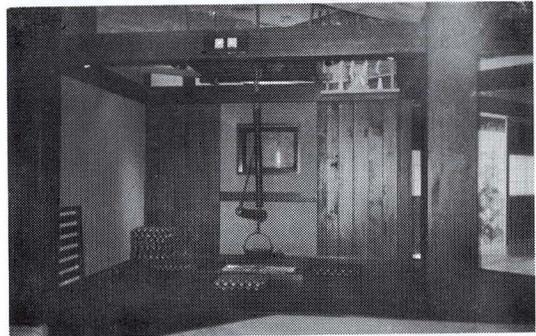
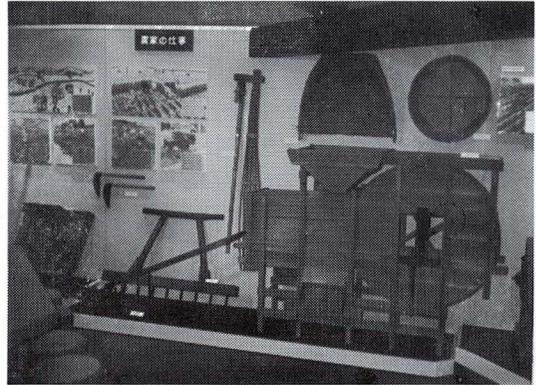
これにより、昭和54年度には科学展示室の7コーナーのうち、その導入部となる自然のパノラマ「森の1日」を製作（全科協ニュース Vol. 9, No. 2 で紹介）、更に今年度、ふるさと東京「農家のくらし」を展示することとなった。

これらは、科学展示室の1コーナー約80㎡を毎年整備し、7年間を1サイクルにした展示更新計画の一環であるが、東京都の抱える財政事情等から、毎年更新できず飛び飛びの更新となっている。

今回の展示の目的は、かつての人間が、自然から純真に恩恵を受けていた農耕文化の中で、人間相互の心の触れ合いや協力のもとに四季折々の生産活動を行っていた事を学びとり、現在の生活文化を見直し、将来の科学技術の在るべき姿を探るものである。

その目的のため、(1)都内の小学校3・4年生に焦点を合わせ、(2)児童が展示物と接触できる空間を広く取り、常居、土間の部分には積極的に立ち入らせる。(3)展示される農耕具は全て手に触れられ、使用感等の擬似体験ができるようにする。(4)児童がその場を利用して自主的に遊びながら、科学的な知識を身に付けられるようにする。(5)長期の展示に耐えられる夢のある展示とする。(6)科学展示室の全体整備の中の展示とし、他のコーナーとの関連を配慮する。

環境設定として、(1)科学展示室全体構想のうちの近世を割り当て、(2)江戸時代末期から大正時代の、(3)東京圏で、(4)中程度の生活を営む農家を想定、(5)常居、土間、流し、庭等の一部を復元し、内部に農具、生活用具、こ



どもの遊具等を配する、(6)展示の季節は特定せず、視聴覚機材により四季折々の季節感を味わえるようにする、(7)また特に、展示の利用者が児童であることからして、安全面、防災面には、充分に配慮した展示とすること、などを骨子とした、ふるさと東京「農家のくらし」整備概要を作成した。

この概要をもとに昨年9月に製作予定価格3千600万円で、展示業者7社による概要のデザインコンペを行い、株式会社日展のデザインを採用、その製作を委託した。

このようにして、科学展示室の1コーナー77㎡を使用して製作が始まり、基本設計を含めて5か月間で完成、3月20日（春分の日）東京都児童会館開館20周年記念に、一般公開されることとなった。

ここに紙面をお借りして、当企画製作にあたって多方面から御協力いただいた全科協会員館園の皆様へ深く感謝すると共に、是非東京都児童会館にお立ち寄りいただき、更に御指導賜りたく重ねてお願い申し上げたい。

(落合善郎)

## 全科協北から南から

## アマチュア無線クラブの活動を通して

川口市立児童文化センター 松田正彦

昭和36年、川口市に児童文化センターができ、その頃小学生であった私のかっこの遊び場の一つになった。展示室の片隅にガラス張りのアマチュア無線(ハム)コーナーがあり、ラジオのような無線機を操作しながら交信(QSO)する姿や声が聞こえていた。当時まだハムなどあまり一般に知られておらず、日曜日のたびに憧れて見ていったものであった。

昭和53年、当センターに46年から設置されたプラネタリウムの解説員として勤務するようになり、ハムのライセンスを持っているということでハムクラブの世話もすることになった。しかし、昔のハムコーナーはなく、無線機もほころにまみれていた。解説の空き時間を利用して、屋上で一人アンテナ線と悪戦苦闘、そして、無線機のスイッチを入れた。当クラブ局のコールサインJA1YJVが久し振りに電波にのった。コールサインを聞きつけて近くのハム仲間や免許取りたての中学生ハムが集まるようになり、いつのまにか再びクラブが動きだした。

まず、初めに取り組んだことはハムの醍醐味である日本いや世界中のハムとQSOを楽しむ、いろいろな人と仲間になれるということを多くの人たちに知ってもらうため、日曜日の公開運用であった。後ろから小学生が不思議そうな顔をしてのぞき込む姿は、昔の自分を見るようであった。クラブ員の数も増え、会長だ、理事だと組織化が進み、クラブの形がだんだん整ってきた。交信技術などを競う日本アマチュア無線連盟(JARL)主催によるコンテストの中の一つに参加し、徹夜でマイクをにぎりしめ、日本中のハムと交信して、記録をつけ、整

理し、まとめる。個人プレーではなくクラブとしての共同作業である。57年からは会報誌をがり版刷りで作り始めた。原稿を集め、編集、印刷。創刊号ができるまでだといふ苦労した。他のクラブとの情報交換なども始めた。

そして、ハムをPRする前にエレクトロニクスについて、もっと小学生に体験を通し興味を持ってもらうために、以前から行っていた、電子工作教室を充実させていきたいという希望が話し合われるようになってきた。教室はあくまでもハムクラブが中心になって実施する。何を作るか、費用はどのくらいかかるかの検討や、部品の購入(秋葉原という電子部品を安く買えるところがあり便利である)、当日の製作指導、つまり、部品の説明、回路の原理説明、道具の使い方などである。センターとしては、広報・募集・会場と道具の貸し出しをするだけになる。

とはいっても、こちらの手間は以前より増した。しかし、クラブ員のセンターに対するかかわり方はまるで変わってきた。受け身ではなく、自らセンターの活動に加わってきたわけである。最初のうちは、時間に追われ指導法も分からず回路を完成させるのがやっとであったが、回数を重ねるにしたがって製作を通し、クラブ員と小学生との間に、一種のコミュニケーションのようなものも生まれ、成果も上がってきている。59年からは方式を少し変え、子供たちが自ら作る、考えながら作るといった、余裕のある教室にしていきたいとも話し合うようになりまでになった。

約20年前、私がセンターでハムに憧れ、数年前、私の発したJA1YJVのコールサインにクラブ員が集まり、そのクラブ員たちがいま後輩たちを育てようとしている。ハムを通し、今日欠けがちである仲間とのコミュニケーション、上下とのコミュニケーションを自然に学びとっているようである。また電子工作教室がきっかけでエレクトロニクスに興味を持ち、ハムクラブの戸をたたいてくれる子供が、一人でも二人でもでてきてくれることを願っている。

クラブを担当して6年しかたっておらず、経験不足であるが、ハムを通してのセンターにおける小さな人の輪について紹介した。皆様の参考にしていただければ幸いである。



## ヨーロッパ科学系博物館視察研修旅行に参加して

東芝科学館 柄木 謙志

全科協のヨーロッパ科学系博物館視察研修旅行に参加させていただき、ヨーロッパの博物館の事情について多くの収穫を得ることが出来たことを厚くお礼申し上げます。訪問各館の事情については、各先生方から発表されているので、感想を中心に述べさせていただきます。

### 歴史を大切にしている

ミュンヘン・チューリッヒ・ルツェルン・ロンドンと訪問した各都市には、古い建物が建ち並び、多くの公私立博物館が沢山の史料を大切に展示保管しており、市民が展示物を前に熱心に解説を聞いたり、資料片手に勉強している姿が随所にみられた。また、館によっては夜間も開館して一般市民に便宜を計っており、博物館が日常生活の中に溶け込んでいて、社会的役割は日本より大きいと感じた。科学系博物館も多くのスペースを史料の展示に使用している。企業館も社史を中心の製品展示であり、ドイツ博物館のシュルフ氏が「歴史を通して現在をみる、また、現在から過去を振り返り、その過程をみるのが大切である」と言われたが、ヨーロッパの人々が自分たちの歴史を大切にしているとよく理解できた。

### 博物館の規模が大きい

模型より実物の展示、模型でも実物に忠実なものが見学者に訴える力がある。ドイツ博物館・ルツェルン交通博物館等訪問した各館とも建屋の中に昔の機関車・自動車・飛行機等の実物が展示されており、ドイツ博物館では当時の状態で動かなければ意味がないと、内部構造まで当時の状態に修復されているので、見学者に大変迫力を与えている。やはり実物の展示がないといけないし展示物にふさわしい建屋が必要である。

### よく考えた展示をしている

史料を多く陳列するだけでは意味がない。例えば大英自然史博物館では、各展示部門で展示方法が検討され、現代人に理解し易い、楽しい展示をしていた。温度センサーに手がふれると鳥が鳴くようにしたり、見学者が自分でマイコンを操作して人間の構造が勉強出来るようにしたり、展示コーナーの紹介を丸太小屋風の部屋の中で自由に操作してみることが出来、外からは中の進行状況がわかるよう工夫してある等々見学者に親切的な演出をしていた。現代人に合った新しい技術を利用した展示方法を常に考えることが大切である。

### 展示史料の整理保存がいきとどいている

ヨーロッパの各館が沢山ある史料を分類し、展示保存しているが、リスト化され見学者にも希望の史料が簡単に探し出せるようにしてある。また、利用者もそれらの史料を大切に扱っていることは見習う必要がある。

### 館内の案内が親切である

異なる言葉の国々の集まりであるヨーロッパの特殊事情もあると思うが、数か国語のパンフレット資料が準備され、案内ボード見学順路等を色別にし、シンボルマークを使用したりして見学者にわかり易いよう配慮されている。ルツェルン交通博物館には日本語のパンフレットがあった。国際化した現在考えなければいけないことである。

### ボランティアを活用している

各館とも館内説明や仕事を館員でまかなうことは経費的に大変なので、教育されたボランティアが多数活躍していた。また、市民が当然やるべきことと奉仕していることは誠にうらやましい。

### 教育に熱心である

各館独特の教育方法を持っているが、一般社会人に対する教育、青少年に対する教育を、はっきり区別し各部門の権威者が研究し、テキスト資料を作成して指導している。特に青少年に対する教育には熱心で、学校の先生方に対する資料の提供はよく出来ている。先生が生徒を展示物の前で教育していることは、実物や実物に忠実な模型であるので生徒にはよく理解出来ると思う。この様に博物館が教育に活用されることが本来の姿だと思う。

### 新技術の展示には苦勞している

大英自然史博物館では10年から15年の展示計画をたて毎年見なおしを行っているが、展示物が製作中に古くなったと結論が出れば、途中で中止し計画を変更するということがあった。現在のように技術の進歩が速いと将来の見通しもむずかしく、我々同様大変苦勞しているようである。しかし新技術の展示は必要である。

歴史を大切にすること、その過程をよくみること、いかに社会に役立つか、その役割を明確にして活動することが大切であることを改めて感じた。

## 会 員 館 園 の 紹 介

## 倉敷市立自然史博物館

当館は、市民が郷土を中心とした自然の生い立ちと現在の姿を知り、自然と人間の正しいかかわりかたを考えるよりどころになることを願ってつくられた。

建物は旧水道局庁舎が改装されたもので、2階、3階および地階の一部が自然史博物館に、1階は無料観光休憩所にあてられている。隣接する中央図書館、展示美術館とともに倉敷の新しい文化ゾーンとして、昭和58年11月3日にオープンした。倉敷駅から南に歩いて15分、自壁の町並で知られる美観地区の大原美術館から200メートルの距離にある。

## 展示の概要

常設展示は高梁川と瀬戸内海を背景とした倉敷をとりまく自然を中心にすえ、既存資料が豊かであった昆虫と植物を添えた4つのテーマ、「瀬戸内海のおいたち」、「高梁川流域の自然」、「昆虫の世界」、「植物の世界」で構成されている。それに特別展示室を併設、規模は5室で840㎡である。

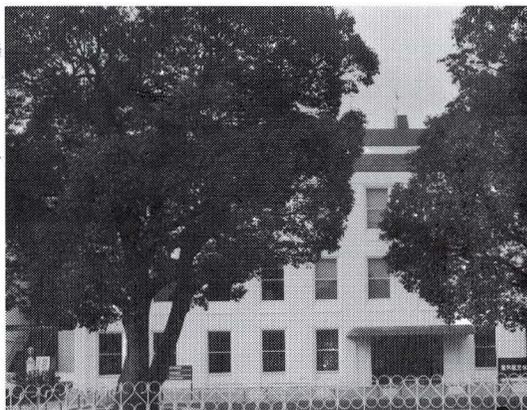
展示にあたっては地域の特異性を重視するとともに、身近な自然をとり入れたストーリーの組み立てに留意している。各展示室の概要は次の通り。

## 第1展示室「瀬戸内海のおいたち」

瀬戸内地方にも巨象のすんでいた更新世以後の自然をとりあげている。ナウマンゾウの全身骨格模型（レプリカ）、備讃瀬戸海底産ホニウ類化石（ナウマン象、東洋象、水牛、鹿等）、古代人のくらしを示すジオラマ、古代人遺跡の遺物（魚骨、貝殻、獣骨、石器片、製塩土器等）、現在の瀬戸内海産の代表的生物標本（カブトガニ、ナメクジウオ、タマノミドリガイ等）などが資料として用いられている。

## 第2展示室「高梁川流域の自然」

古生代以後の資料が用いられている。高梁川流域の生いたちを示すとともに、ここに生息する生きもの、流域の特徴的景観を展示している。新見地方カルスト台地のジオラマは4月下旬の情景を再現、当地ならではの生態系の一断面を忠実に展示することに意を用いている。特徴的な動植物ではシロヤマブキ、チョウジガマズミ、キビノクロウメモドキなどのレプリカ、ウスイロヒョウモンモドキ、ペニモンカラスシジミ、ニシキケンカメムシなどの実物標本が用いられている。この展示室にはビデオブースが2基設置されており、自由に観覧できる。



## 第3展示室「昆虫の世界」

倉敷で見られる身近な昆虫から、岡山県、日本、世界へと目を広げ、昆虫の多様さと適応のすばらしさ、人とのかかわりあいなども展示している。倉敷、岡山県、日本の昆虫については、それぞれ環境別、自然分類別、分布系統別に配列している。また、種族維持のためのさまざまな適応例やいくつかの害虫を紹介している。世界の美麗蝶や巨虫には多くの観覧者が目をうばわれているが、ゴキブリやチチュウカイミバエなどにも特別の関心が寄せられている。

## 第4展示室「植物の世界」

身近な植物を材料に、植物界の多様性とまとめ、人とのかかわりあい、生物相互のつながりを展示している。植物腊葉標本のもつディスプレイ面の単調さから抜けだすための展示手法には、変化をだすよう留意している。苦心したものには真空凍結乾燥によるキノコの実物標本展示、イネ、コムギ、オオムギのそれぞれについての野生種から栽培種へと進化していく過程の展示、ドライフラワーにしたキク科植物の展示などがある。

## おわりに

当館は展示構想が固まってから開館までの期間がはなはだ短く、館員が就任からおよそ半年で資料集めと展示製作を仕上げ、開館にこぎつけた。それは館外市民の協力をはじめ、関係各位の一方ならぬ尽力があったからこそである。

所在地 710 岡山県倉敷市中央2-6-1

電話 (0864) 25-6037

## 福岡市立少年科学文化会館

福岡市立少年文化会館は昭和46年に設置されて以来、青少年の科学文化活動の場として利用されてきたが、このたび子どもたちの教養の向上と情操のかん養を図るとともに、科学に対する関心と理解を深め創造性を培うため、科学部門を拡充整備することとなり、昭和56年4月にプラネタリウム館を開設した。さらに科学展示ホール等を増設し、名称も少年科学文化会館と改め、装いも新たに昭和58年11月3日に開館した。

### 施設

当館は、鉄筋コンクリート造り、地上6階、地下1階建てで、総床面積7,623㎡の規模である。各部門別に見ると、次のとおりである。

展示部門 1,302㎡……たのしい科学、くらしの科学、自然の科学、特別展示ホール等  
 教育普及部門 2,142㎡……各種実習室、プラネタリウム、図書室等  
 ホールその他 4,179㎡

### プラネタリウム

直径12.4mドーム、座席数140席、主機GX-10ATの本体で、補助映機35種117台である。投映は、平日4回、土曜2回の学習投映、及び平日1回、土曜3回、日祭日5回の一般投映を実施している。一般投映は年4回プログラムの変更を行い、季節の星座や星座物語と天文の興味深い事象をテーマにして、天文についての知識を楽しみながら深められる内容にしている。また、毎年プラネタリウムの星を見ながら音楽鑑賞をする「星と音楽の夕べ」を実施し、多くの市民に好評を得ている。

### 科学展示ホール

科学展示ホールは、天文・宇宙(1F)、たのしい科学(2F)、特別展示ホール(3F)、くらしの科学(4F)、自然の科学(5F)の1コーナ4ホールで構成している。展示に当たっては、「見て、聞いて、ふれて、体験する科学の広場」をテーマにして、動きがあるもの、数多くの人に参加でき、ソフトウェアの変換を容易にできるものを主体とした。ここでは、新たに増設した科学展示ホール(4階、5階)について紹介したい。

4階くらしの科学展示ホールは、今日のくらしや産業に利用されている科学技術、あるいは最新技術と言われる展示物や遊びを通じて、科学に対する興味や関心を高める展示など、科学とは何かを体験する広場としている。

2～3の例をあげると、まずシンボルゾーンのメカニカルアートである。円運動が垂直、水平、収縮等の運動にかわるしくみを子どもたちが、興味をひく形や色彩で表したもので、展示ホール全体のシンボルとしてなか



か好評である。産業用ロボットは、絵をかいたり、スタンプを押したり、ロボットの働く様子を説明したりで、毎日忙しく働いている。また、鉄道模型パノラマでは、模型の中央付近に2カ所展望窓を設けて、なるべく近くで、しかも列車と同じ高さで見学できるように工夫したことにより、臨場感を味わうことができる。

5階自然の科学展示ホールは、自然界の事物、事象の観察を通して、身近な自然を科学的にとらえ、基本的な科学概念の理解と知見を深める広場である。内容としては、気象衛星からの受信システムのある気象の科学コーナー、1億5千万年前から現在までの大陸移動の様子を知る装置がある大地の科学コーナー、福岡とその周辺から採集した岩石、鉱物や貝等を展示した岩石と鉱物コーナー、魚と貝コーナー、結晶、微生物を観察する、顕微鏡コーナー等、地球をマクロからマイクロへと解剖してゆく展開としている。



### 普及活動

当館では、会館の施設設備を学校の学習活動にも活用するため、平日に市内全小学校3年生を対象に「会館1日学習」を実施している。土曜・日曜日には、市内の小中学生を対象に各種の少年文化クラブや、科学文化教室等を開催している。そのほか、優れた演劇、音楽、映画などの鑑賞と発表の場として、ホールで館主催の「こども芸術劇場」を毎月開催している。今後も更に、少年少女発明クラブの設立や科学教室等の充実を図っていきたいと考えている。

所在地 福岡県福岡市中央区舞鶴2-5-27

電話 (092) 771-8861

## 会 員 館 園 の 消 息

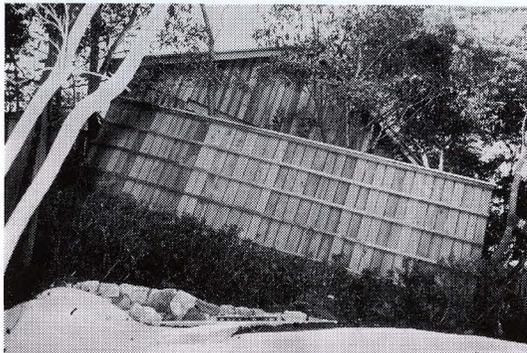
## ミステリーゾーンを新設

白浜エネルギーランドでは、このほど人間の感覚の不思議さを扱った「ミステリーゾーン」を、敷地内に新しく設けた。引力にさからうようにボールが坂を登る、水が上に流れる、登ろうと思っても登れない階段、座ったら立ち上がるのが大変な椅子など、視覚や平衡感覚が狂ったような感じになる、興味深い体験をすることができる。

木造平屋建てのミステリーハウス（60㎡）とまわりの樹木、これらを取り巻く塀で構成されているが、できるだけ自然を生かしたゾーン（地域）としているところに特色がある。この場所への順路には、14m程の丸木橋、丸太トンネルがあり、また岩の間から湯煙が立ちのぼるなど、それらしく雰囲気づくりもおこなわれている。



まっすぐ立っている筈なのに傾く身体



立つ位置によって背文が変わる背較べ台

## あとがき

- 館長の交替等の人事異動、その他会員館園に流したいニュースがありましたら御一報ください。
- 本ニュース編集委員の山田英徳氏は、出向先の(財)国

## 科学者レオナルド・ダ・ビンチ展の開催

国立科学博物館では、昭和59年度移動展「科学者レオナルド・ダ・ビンチ展」を次のように開催することになった。

4月1日～4月15日	宮古市立図書館
4月21日～5月13日	盛岡市子ども科学館
5月19日～6月24日	山形県立博物館
7月1日～7月15日	八戸市福祉体育館

## 「富山県植物誌」の刊行

富山市立科学文化センターの長井真隆館長をはじめ、大田弘、小路登一氏によって準備が進められてきた「富山県植物誌」が完成し、廣文堂から出版された。

永年にわたるフィールド・ワークが基礎になっている本書は、富山県の置県百年を記念したものであるが、植物研究に携わる者にとっては大変貴重なものである。立山をはじめとする山岳地帯から海岸まで特異な植物分布を示す富山県について、その植生、植物目録等がまとめられている。特に植物群落については詳細に記載され、かつ使用しやすいように配慮されている。

写真口絵24ページを含み総430ページの本書は、定価6,000円である。なお、発行は昭和58年12月31日。

また、長井館長と同センターの布村昇学芸員の報筆による「食卓の自然誌—とやまの味再発見—」（北日本新聞社、1984. 1. 8）も発行されている。富山県の動物や植物を季節ごとに料理法なども入れて紹介している楽しい読み物である。

## 〔新入会〕

- 浜松市児童会館 館長 鈴木 敏夫  
☎430 静岡県浜松市利町 302-8  
Tel. (0534) 54-0178

## 〔電話番号変更〕

- 船の科学館  
4月1日からダイレクト・イン方式になります。  

会長・役員	582-1110	管 理 課	582-1114
総 務 課		企 画 課	582-1115
経 理 課	582-1112	展 示 課	582-1113
		業 務 課	582-1111

際科学技術博覧会協会から2月1日付けで(財)日本科学技術振興財団(科学万博推進室, 課長)に戻られました。

- 皆様からの御投稿をお待ちしています。(事務局)